『善と悪』

地獄の門が開かれてから一時間ほどが経過しただろうか？かつて巨大な城塞都市があったメルクスは
市街中心にそびえていた鐘楼一つを残して消失していた。跡には、
一体何処に底があるのか窺い知る事のできない巨大な穴が出現している。
メルクス周辺に存在した十万人余りの難民が生活していた集落も消えていた。
こちらは地獄の門を通じて現世に、テッラムリアに出現した『ワーム』配下の悪魔たちになぶり殺され、
丸ごと殺戮されてしまったからなのだが、どちらにせよ、
かつて都市メルクスが存在した場所には、その『ワーム』配下の悪魔たち、五個軍団以外に存在するものはなかった。

殺戮の宴を楽しんだ悪魔たちは六百体を一大隊として整列を始めている。
自己中心的な利己主義者である悪魔たちだが、地獄の階級社会はテッラムリアのそれよりも大変厳しく、
内心はともかく表立って反抗する者はなく整然と隊列が組まれ、総指揮官である『ワーム』の号令を待っている。

その『ワーム』と言えば参謀長とも言える狼頭のルポレットから最初の報告を、
鐘楼に持ち込んだ長椅子に寝そべりながら聞いていた。

「『天使王国』有力諸侯の宮殿への奇襲は終了しました。出撃五十に対して、未帰還は五です」

淡々と冷静に報告するルポレット。それを聞いた『ワーム』は幼い顔をしかめた。

「未帰還が五？」

「五ですね」

「一割が帰ってきていない？」

「言い換えればそうですね」

「・・・逃亡したとか？」

「逃亡される理由があるのですか？」

『ワーム』の質問にルポレットは逆に尋ね返す。
言われて一瞬考えた『ワーム』だが、出撃した上級悪魔たちが彼の指揮権から離脱したがるようなヘマは、まだ犯していないはずだ。
戦いの前の景気付けとして人間の魂を大盤振る舞いしてやったのだから、不満などないはず、と『ワーム』は判断する。

となると考えられるのは一つだ。

「・・・やられちゃった？」

「そういう事になるでしょうな」

「数百年ばかり実戦から遠ざかっていた連中だから鈍ったのかな。
人間なんかに五体もやられるなんて。ん？未帰還の連中が向かった先はどこなのさ」

「ダルマーク、ウォレンサー、フォリヴァス、ランキン、シルポートです。

ちなみにオウルバインは宮殿を吹き飛ばしたものの、当主はもちろん主要な貴族は不在だったそうです」

「あー、そういえばオウルバインは大軍を引き連れてアンゲルウルプに進撃中だったなー・・・忘れてた。ふーむ、なるほど」

「何を納得されているのです？」

「いや、今名前を聞いた諸侯ってのが、ウォレンサーとフォリヴァス以外は辺境の諸侯だからさ。
在地の魔物と臨戦態勢にあるから、奇襲を受けても対応してきたって事なんだなぁと思っただけ。
僻地にいるからすぐさま軍勢を組織してメルクスまでやってくる事はないよねーとか思ったりして」

「ははぁ、なるほど」

「ウォレンサーは重装騎兵が充実しているらしいから、
その連中と鉢合わせしたら無傷では済まないなぁ、とは思っていたけど、意外なのはフォリヴァスだなぁ」

「何故です？一応王国宰相の地位にいますが」

「あぁ、あんなの持ち回りの称号だよ。その諸侯個人の実力が宰相の権限になるという実態のないもの。
政争は得意な中原諸侯の親玉だから、政治力はあるけど荒事に対する即応能力は低いと思っていたんだ。意外だなー」

「その件に関しては報告が」

「なんかあるの？」

「フォリヴァスに向かった者が消滅前に思念波を飛ばしてきましてね」

「悪魔にしては律儀な奴だなー。それで？」

「『こんなところに天使がいるなんて、聞いてねーぞ！』と文句を垂れておりました」

「あらまぁ。不運だねぇ。二百年前に撤退したと思った天使がまだテッラムリアにいたのも驚きだけど、
そんなのと不用意に戦う羽目になっちゃったそいつに同情もするね・・・って、まてよ？フォリヴァスって何処にいるんだっけ？」

「アンゲルウルプの執政宮殿ですな」

「・・・あー、その天使というか天使もどき、心当たりがあるんですけど」

「それはよろしゅうございましたな」

「・・・いいのかな？」

「敵の情報は多いに越した事はないでしょう」

「でも事前にそれを知らせていないと意味ないよね」

「そうですね」

「・・・じゃあ、僕はその件は知らなかったという事で」

「では、閣下は必要な情報を部下に伝えなかったという事で記録しておきます」

ばっくれようとした『ワーム』に対し、ルポレットは淡々と事務的に答えた。それを聞いて『ワーム』は慌てる。

「ちょっ、ちょっと待ってよ。そんな記録、しちゃだめだよ！」

「何故です？前線の兵士に有益な情報がもたらされ　ないのは、軍においては有害な事です。敗北の原因になりかねません。やはり閣下の責任を明確にする事が、軍の勝利にとって有益な事であると信じるのですが」

「そりゃあそうだけど、でもまずくね？」

「重要な情報を黙っている方がまずいですね」

「いや、忘れていたんだけど・・・」

『ワーム』のしどろもどろの言い訳などルポレットはまったく耳を貸さなかった。

かといって怒っているとか軽蔑しているとか、そういった感情もまったく表に出さず、淡々と事務的に事実のみを口にする。

このつぶらな瞳の狼頭を持つ悪魔と『ワーム』の付き合いは長い。

『ワーム』の書記官であり事務処理能力は折り紙つきだが、悪魔としての戦闘力が優れているとは聞いた事がない。

精神攻撃の類は一切受け付けないし、強力な呪文使いではあるのだが、

しかし強力な悪魔は魔法に対する耐性力を持っているものだし、

実戦力としては『地獄の先触れ』であり『地獄の諸君主』に匹敵する破壊力を持つ『ワーム』が恐れるような存在ではない。

しかし、どうもこのルポレットと話をしていると調子が狂ってしまうようだ。

いつもなら無責任に適当な事を言って相手を煙にまく『ワーム』がやり込められている。

それでも『ワーム』はルポレットに対して気分を害しているわけではないようだ。

事務官としてのルポレットの能力を高く評価しているだけでなく、相性のようなものなのかも知れない。

「・・・反省してマス」

小さくなって呟くように『ワーム』が言うが、ルポレットは気にした様子もなかった。

「それは結構です。で、今後の方針ですが、どうされますか。

人間の有力諸侯の九割はしばらく戦闘能力を喪失しているでしょう。とはいえオウルバインの大軍は既に集結しています。

戦闘能力の高いウォレンサーその他も健在です。速やかに残存戦力の殲滅を行うべきだと思いますが」

『ワーム』が考え込んだのは一瞬だった。それから先は用意していたようにスラスラと作戦が出てくる。

「十個大隊をオウルバイン軍に差し向けよう。多すぎるかも知れないけど、

とりあえず南方諸侯が結集した大軍を一戦で壊滅させれば、人間達の気勢も削がれるだろう。

残りの四十個大隊で手分けして諸侯の城、善神の神殿を虱潰しにしていこう。

目に見える形で戦域を拡大してやればオークやゴブリンどももこちらに合流しやすくなるだろう」

「人間の諸侯に対してはそれで良いとして、エルフやドワーフの諸族に対しては？」

「虱潰しでいいんじゃないかな。連中は人間よりも組織力があり、能力も高いとはいえ、結局のところ数が少ない。

オーク、ゴブリン、コボルトとは神話の時代からの敵対関係にあるし、連中を動員できれば分断して各個撃破できるんじゃない？」

「ではそのように。それで、アンゲルウルプに対してはどうされますか？」

ルポレットの質問に『ワーム』は不思議そうな顔をした。

「アンゲルウルプ？なんでまた」

「かつては『天使王国』の中枢であり、今また『王国宰相』の称号を保持する者がいます。
我々に敵対する軍を組織する大義名分を持つものが存在するというのは、戦略上不都合ではありませんか？」

「それはそうだけど、しかし長駆アンゲルウルプを突く為に一個大隊を派遣するかい？
大隊全部をテレポートさせるのは無理だし、飛行部隊を抽出して送り出すにしても突出させる事になる。リスク高くね？」

「確かに兵力の損耗は低ければ低いほどよろしい。しかし敵勢力の中枢をできるだけ破壊する好機を見逃すのは惜しい。・・・が、
閣下はなるべく損失を抑えるように戦いを進めたい、と？」

「心優しい僕としては、部下を死なせるのは忍びないんだよねぇ」

『ワーム』はうそ臭い言葉を大真面目で吐いたが、ルポレットはまったく本気に取らなかった。

「そんなに諸君主方に援軍を仰ぐのがお嫌ですか」

「うん。嫌」

例によって『ワーム』は無邪気な顔で言い切る。

『ワーム』個体の能力は地獄の諸君主に匹敵するとはいえ、支配領域は諸君主たちとは比べ物にならないほど小さい。
指揮する軍団も、天使達との戦争を今も戦い続けている主力を担う上級悪魔の将軍達に比べれば数は少ない。
生来怠け者の彼は、部下を増やす事に不熱心で、単独でテッラムリアその他の世界に尖兵として現われ、
現地の生物を煽って策略を実行する事に慣れているせいか、その能力に見合うほどの戦力を持っている訳ではなかった。

この先、戦いが激しくなり、戦域が拡大されて手持の戦力が不足するようになったら援軍を求めなければならない。
増援を求めるならば、それを指揮している悪魔たちにそれなりの見返りを与えなければならない。

『ワーム』はそれをケチっているのだ。部下の数は気にしても部下の命を気遣うなんて事を、悪魔がする事はない。

「敵の指揮中枢を破壊すれば、この先も組織だった抵抗をあまり受ける事はないと思いますが、それでもですか」

「指揮中枢は、どうやったらその役割を担えるんだい？」

突然『ワーム』が質問を仕返す。ルポレットは首を傾げながら答えた。

「組織された味方の兵力に効率良く指示を出し、的確適所に兵力を配置する事、ですかね」

「つまり命令を正確に伝達できなければ、いくら指揮中枢が生きていたとしても無意味でしょ？人間達が取りうる連絡網は、
魔術師の伝や神殿の組織、そして自身の早馬だ。主だった諸侯の宮廷を潰して、宮仕えの魔術師たちは大方消した。
神殿を攻撃しろと、今さっき命じた。後は、街道網を寸断してやれば早馬なんてそうそう用意はできないじゃないか。
ね？無理して突出させなくても目的は達成できるよ」

確かにそう言えなくもない。宮仕えの魔術師は各諸侯の宮廷を結ぶ連絡網をつくっている。

神殿も善なる神々の親密度によって神殿組織は連絡を取り合うようにしている。
早馬は、宿場町ごとに代え馬を用意しなければ機能しない伝達方法だ。
手早く悪魔の軍団が展開して宿場町を混乱させれば早馬による連絡網は機能しなくなる。

『ワーム』は自分の言葉に満足し、完璧な戦略だと言いたそうにしている。しかしルポレットは再び首を傾げた。

「今考えましたね」

「う、解る？」

「閣下との付き合いは長いですからね」

「ダメかなぁ」

「ダメではないでしょうが、万全とは言いがたいですね」

「しかし、万全な戦略なんてあるのかな？それにねぇ、アンゲルウルプに一個大隊投入したとしても、目的を達するのにその一個大隊が壊滅するような気がしてならないんだよねー」

「宰相大公を守った天使がそれほど強いという事ですか？」

「天使というか、天使もどきというか、何にせよ、『悪』と戦うために人生棒に振っているような奴がいるからねぇ。あれを滅ぼす為に一個大隊ぐらい磨り潰してしまうような気がするんだよねー」

「手駒の消耗を避けたい閣下としては、なるべく戦いを避けるべき相手だと？」

「相手をするなら大勢が決した後で、いくらでも磨り潰して殺してあげるんだけどねぇ、やはりテッラムリア制圧前に手駒を失うのは痛いよね」

「増援を請うおつもりはなさそうですしね」

「いや、ほら、なるべく諸君主方に借りなんかつくりたくないじゃん。
せっかく莫大な魂が手に入ったんだし、丸ごと手元においておきたいじゃん」

ついに『ワーム』はにこにこ笑いながら本音を言った。
ルポレットも通過した、『ワーム』が開設した地獄の門を一瞥して彼は納得する。
確かに巨大な門ではある。しかし二十万もの魂を使って開設した割には安定性に欠けるところがある。
もしも、魔法でも物理的な力でもぶつけてやれば、あっという間に門は存在できなくなり消滅する。
そんな張子の虎のような危うさを感じたものだ。

ルポレットは左目の上の、眉に当たる部分を動かし、初めて感情らしきものをあらわにした。

「ガメましたね」

「いいじゃないか。何百年もテッラムリアで苦労して策略を巡らし、計画を立てては潰され、地獄の諸君主の為に働いたんだ。これぐらいの役得があってもいいだろ？」

「閣下がそんなに勤勉であったとは、初めて知りましたよ」

「うん、実は僕もなんだ」

『ワーム』はへらっと笑う。ルポレットは溜め息を漏らした。

「着服した魂を丸まる手元に残すならば、確実かつ慎重な戦略、用兵が必要です」

「解っているじゃないか。その為に君を呼んだんだよ。頼りにしているよ！」

全幅の信頼をルポレットに置いていると言う様に、『ワーム』はけらけらと笑ったが、
ルポレットはそんな事で騙されることはなかった。彼は冷静に言った。

「今思いつきましたね、それ」

「まぁね」

『ワーム』は悪びれもせず肯定し、にやりと笑った。

先ほどポルメリアが『ワーム』配下の上級悪魔と戦った謁見の間では、
『天使王国』宰相として悪魔との戦争を戦う決意を表明したカシュール・フォリヴァスが、
彼の廷臣たちと戦略方針を立てる為の会議を始めている。

彼らを散々煽ったフィスエシルはお供のエルフの少女とポルメリアを連れて、とっとと退席してしまった。

ポルメリアは『悪』との戦いこそが人生の目的であり、

悪魔との戦争こそ自分の力を役立てる絶好の機会であるから会議に参加しようとしたのだが、
戦術ではなく政治の話になるから無駄、と主張するフィスエシルに、半ば強引に同行させられてしまい、
執政宮殿の奥にある都市魔術師の塔に連れてこられていた。

「夕食は済んだ？」

上級悪魔が結界を破って侵入してきた際に、
その余波を受けて亡くなったらしいフィスエシルの弟子たちの遺体が安置されている部屋を通り過ぎる。
しかしフィスエシルの声には哀しみは微塵も感じられなかった。その事に当惑しながらポルメリアは答える。

「いえ・・・夕方からこっち、戦ったり友人を弔ったりしていましたから」

「あらまぁ。それは気の毒に」

フィスエシルの言い方が余りにも軽々しかったのでポルメリアは眉をひそめた。

「それはどちらの事ですか？」

思わずそう尋ねてしまう。しかし振り返ったフィスエシルには悪びれた様子はなく、また不機嫌になった風でもなかった。

「両方よ。友人を亡くすのは悲しい事だわ。そしてお腹が空くってのも悲しい事よね。生きているんだから食べないと始まらない」

それにしては、その悲しさというものを表現しているとは言いがたい口振りだ。
立て続けに友人を亡くしたポルメリアにしてみれば無神経な印象さえ感じる。それが顔に出たのだろう。

フィスエシルはペロっと舌を出して弁解した。

「あぁ、またやっちゃったわね、私。ごめんなさい。
私だって長い付き合いの弟子を亡くした事は悲しいのよ？でも、ほら、私達は人間よりも寿命が長いじゃない。
貴女たちのように深刻にはなれないのよ」

「どうしてです？」

「あたし達エルフの感覚からすると十年なんて瞬く間だわ。
でも貴女たち人間にとっては一昔と言えるほどの時間でしょう？あたし達にとって人は余りにも生き急ぎすぎる。
夢か幻のような存在とも言える」

フィスエシルの背には純白の羽が一対ある。しかしその耳にはエルフの証が出ている。
片親が天使であるとはいえ、彼女はエルフの共同体の中で生きてきたのだ。
そしてエルフたちとともに時を過ごしてきた。自分自身の事をエルフの仲間と捉えているとしか思えない発言だ。

「私はこれでも二百歳を超えているわ。エルフから見ればまだまだ若者。
しかし人から見れば大長老ともいえる歳。
私に求婚しているカシュール坊やなんて、つい先日まではなたれ小僧だったのよ？それが今じゃ『王国宰相』様で、
『天使王国』の玉座を手に入れる為に、私に求婚している。

貴女たちにとっては真剣な話でも、私から見れば何かの冗談にしか聞こえない。
私の感覚では、彼は私と結婚した途端に年老いて、そして死んでいくのでしょうね。

ほんと。夢か幻か、あるいは悪い冗談みたいなものよ」

「冗談・・・ですか」

「あ、ごめん。またやっちゃった。でも時間の感覚があたし達と人とは違うという事だけは覚えていて」

「冗談としか思えないのに、宰相大公殿の求婚を真剣に考えられるのですか？」

それはポルメリアにとって当たり前の疑問だった。戦いの中で生き、『悪』との戦いが人生の全てであるポルメリアは自分から、
結婚して家庭をつくり子供を産むという望みを捨てている。どんなに綺麗事を言おうとも争いは憎しみを生み、
憎しみは新たな争いを生む。全てはその繰り返しだ。もし結婚したら、彼女は夫をその負の循環に巻き込む事になるだろう。
子供を産めば、必然的に子供たちもポルメリアの敵から憎しみを受けるだろう。
その全てから家族を守る自信など彼女にはなかった。自分の事だけで精一杯。

だが、自分には手の届かない事だからこそ、結婚というものを神聖視しているのかも知れない。
そんな彼女にしてみれば求婚を冗談と言うフィスエシルの考え方こそ信じられないものはない。

フィスエシルは悪戯っぽく微笑みながらポルメリアに席を勧める。
そしてお互い簡素なテーブルにつくとフィスエシルは供をしていたエルフの少女に合図をした。
少女が給仕するのは、シンプルや野菜スープだった。

「戦う事を生業にしている方には物足りないかもしれないけど、あたし達にはこれで十分なのよ。ごめんなさいね」

「いえ・・・」

「そうねぇ。結婚を冗談と言った事は謝るわ。
エルフはパートナーを一人と決めて添い遂げる風習がないものだから、あまり真剣に考えないのも事実ね」

「どうしてです？」

「何百年も生きているのだもの。その時間を同じ人と共有できる事の方が奇跡だと思わない？
あたし達が男女の愛も冗談だと考えている訳ではないのよ。ただ恋愛には季節があって、それが過ぎれば恋人から友人に、
あるいは疎遠な知人に変わっていく。そういう事なのよ。人の一生は何十年だけどエルフはその十倍生きる事を忘れないでね。
互いを束縛するには長すぎるのよ。

でもまぁ、それはともかく、カシュール坊やに限らず、私に求婚してくる人間の諸侯たちの事は、やっぱり冗談みたいなものよ。
冗談といったら悪いなら、政治のお話なのよ」

「政治・・・」

そこでようやくポルメリアにもフィスエシルが言わんとしている事が解り始めた。

「政略結婚ですか」

「そういう事よ。諸侯同士の結婚が愛情から始まるなんて、
さすがにそんな事は思っていないでしょう？勢力拡大、財産拡充、世継ぎ確保。まぁそういう理由が最優先されるわね。

王国宰相の称号を手に入れた諸侯たちは例外なく私に求婚を繰り返してきた。
人間の諸侯を基準にしたら大した財産も地位も軍事力もない私に、何故そんな事を繰り返してきたか。理由は背中のコレよ」

純白の翼は天使の血統である証拠だ。テッラムリアに住む定命の存在からすれば憧れの対象でもある。
だが打算的な諸侯たちが単なる『憧れ』だけで求婚する筈もない。

「先ほどカシュール・フォリヴァス殿を煽った理由、ですか」

「もともと『天使王国』なんて名前がついているけど、実際に天使の誰かが玉座に座って王位についた訳じゃないのよ。
便宜上、人間の諸侯たちの上に立つ権威として『王国』の名称を使っただけ。
天使たちは長を含めた合議制で全ての物事を決裁していたらしいから、王というものは存在しなかった。

だけど人間達は『王国』を治める者は『王』であると決めてかかっている。
しかし『王』を名乗る為には、それなりの理由と権威が必要なのよね。
そうでなかったらただの自称でしかなく、誰も認めやしないわ。

『天使王国』の『王』となる。一番手っ取り早いのは自分の血統に天使の血を入れること。
即ち、私と結婚して誰にでも解るよう、純白の翼を持った子孫を得る事なのよ。
そうすれば、少なくとも天使の血を引くという権威を手に入れられる。解りやすいしネ」

「では、貴女はご自分の身を呈して、諸侯をまとめ戦う理由を提示されたのですね・・・」

野菜スープを飲み干したポルメリアは、フィスエシルの行為に感動していた。
テッラムリアに住む人々の為、彼らが悪魔の軍団と戦うきっかけとなる為に、彼女は戦争に勝利した者と結婚すると宣言したのだ。
わが身を犠牲するといったも同然だ。

だがフィスエシルはポルメリアの感動に水差すような事を言い出した。

「え？そんなつもりは全然ないわよ」

「は？」

「犠牲になるなんて思っていないわよ、ということ。私にだって選ぶ権利はあるし、
権力はあっても面白味のない男を夫と呼ぶなんて、ご免被るし、何より子供を産む道具にされるのもイヤ」

「しかし結婚されたらそうなるのでは・・・」

「ああ、年がら年中発情可能な人間と違ってエルフには恋の季節があるからねぇ。
恋する時間かしら。ともかく、その時期にならないと子供なんて産めないし、私はまだ母親になる気もないわよ」

言っている事が矛盾している。ポルメリアはフィスエシルの言葉に混乱した。

「それは・・・どういう・・・？」

「王位と結婚を餌に煽ったけれど、選ぶ権利が私にはあるって言う事。
私は面白い男じゃないと嫌だし、愛してもいない男の血統に玉座を保証する為に子供を産む気もないって事よ」

「はぁ・・・」

「だから、私との結婚が政治なのよ。私は結婚相手を選ぶわ。
『天使王国』を維持するだけの組織力、政治力を持ち、それを運営するだけの力を持つ男に玉座を授けるの。
でも血統が能力を保証するわけじゃないでしょう？能力がある男なら誰が『王』になっても同じよ。
その権威を与える為に私との結婚があるのよ。解る？」

「ええっと・・・つまり、結婚するけれども子供は作らない・・・という事ですか。では『王』は一体誰と後継者をつくれば・・・」

「妾でも愛人でも、何でもつくればいいじゃない。私との結婚が政治上のものに過ぎなくて、実際に家庭を築く結婚を別にする、
というのでもいいわ。それなら、合理的じゃない？」

結婚を神聖視するポルメリアからすれば考えられない発想だった。絶句する彼女を前にフィスエシルは言葉を続ける。

「まぁ、その事は後からどうとでもなるわね。とにかく今は、
『天使王国』はもちろんテッラムリアの諸勢力をいかに対悪魔の戦いに結集するかが問題なのよ。
それなら戦いに勝利した後の報酬がはっきりしていた方が、解りやすくていいじゃない？」

「それはまぁ、そうですが」

「結婚するとはいったけど、子供をつくって王朝を築くなんて一言も言っていないしネ」

フィスエシルは悪戯っぽく微笑み、話の間に冷めてしまった野菜スープを飲み始めた。
その事を特に気にしていないらしい。給仕をしたエルフの少女たちもフィスエシルの行動には諦めているらしく、何も言わない。
ポルメリアも溜め息をつくだけにした。

「しかし、このアンゲルウルプの執政宮殿まで襲撃を受けているとなると、他の諸侯の方々は一体どうなっているでしょう」

改めてポルメリアは考えていた事を口にした。『ワーム』がどれほどの数の悪魔を引き入れたのか彼女はまだ知らない。

だが執政宮殿に一体とはいえ上級悪魔が奇襲を仕掛けてきたのだ。
他の有力諸侯の宮殿にも同じように攻撃を仕掛けている可能性は高い。

「まぁ、襲われていると思った方がいいでしょう。それに、善なる神々の神殿もね」

「やはり・・・」

「そりゃあ、悪魔たちにしてみれば諸侯は軍勢招集の拠点だし、神殿は悪魔と戦うための有力な手段を持っている。
神殿の連絡網だって重要だわね。呪文によって遠隔地の諸侯や神殿と連絡だって取れる。
同じ事ができる魔術師は宮廷に仕えているか、もしくは在野だわね。
解らない在野の魔術師は放っておいて、場所がはっきり解っている諸侯や神殿を襲うのは基本でしょう。

先手を取られたのは痛いわね」

とはいえフィスエシルは特に困ったという顔をしていなかった。
冷めてスープを飲み干して、淡々とした様子で感想を口にしている。それが妙にポルメリアに責任を感じさせた。

「私のせいです」

唐突にそう言われてフィスエシルが戸惑った。

「何の話？」

「私はこれまで幾度か『ワーム』その人と会っています。だがその度に何をするでなく逃げられました。
奴は私に気付かれぬ様に幾つも陰謀を張り巡らし、私を煙にまいてきました。
私がそれに気付いていれば、メルクスの魔法陣に気付いていれば、この事態を食い止める事ができたかも知れないのに・・・」

だがポルメリアの落ち込み具合とは反比例にフィスエシルの口調は明るかった。

「かもの話はしないでよ。それを言うなら私だって『天使王国』を魔術的に監視する役割を担っていながら、
まったく気がつかなかったし、そもそもここへ奇襲攻撃されて弟子が結界を突破された余波で殺されなければ、
何が起こったのかも解らなかったのだもの。

過ぎた事は振り返らないわ。そんな事をしても話はちっとも前に進まないもの。
後悔で時間を潰すより、今できる事をやった方が建設的だわ。

んで、私は今、生き残った弟子を総動員して、各地の諸侯、神殿、知り合いの魔術師と連絡をつけているわ。
こちらの指揮系統を混乱させ、反撃の準備が整わないうちにできるだけ戦線を拡大して
奇襲効果を最大限に利用しようとするでしょうからね。
とにかく、事態を『天使王国』中に知らせて、善後策を考えさせないとね」

「今からですか」

「今も、よ。悪魔は眠らない。こうしているうちにも軍団を展開させて進撃中のはず。
できる限り事前に通告してあげないと、恐怖に駆られて何もできないうちに壊滅、なんて事になりかねないし、
今の段階で無事な諸侯や神殿も把握しておこないとね。カシュール坊やたちの反抗作戦の手助けにもなるし」

「すごいですね」

ポルメリアは改めて感嘆の声をあげた。
恐らくフィスエシルは悪魔の襲来を感知した段階ですぐさま弟子達に各地の諸侯、神殿に連絡をとるよう指示したに違いない。
都市魔術師という称号はアンゲルウルプに仕えるだけと思いがちだが、そのアンゲルウルプは王都なのだ。
フィスエシルは『天使王国』全体の事を考えて行動するよう訓練されているのだろう。

目の前の敵を倒す事しか考えていなかったポルメリアに比べれば、考えている事の視野が違う。その事に感嘆したのだ。

だがフィスエシルはそんなポルメリアの賛辞を手を振って退けた。

「いやー、そう思いついただけで、全部弟子たちにやらせているしね。
苦労しているのは弟子たちだし、おかげで私はこうやって、人間でありながら天使の眷属となった貴女の話が聞けるというわけ」

そういうなりフィスエシルはその瞳を輝かせた。
いや、何故かポルメリアは自分が猫に狙われた鼠になったような、そんな感覚に捕らわれた。

「弟子達を監督する立場としては、休む訳にはいかないし、かと言って退屈なのは間違いない事だし、
ぶっちゃけ暇潰しなんだけど、話してくれない？貴女の物語を」

「・・・そんなに面白くないですよ。後悔の連続ですし」

自嘲気味に笑うポルメリア。だが残酷な猫を思わせるフィスエシルの言い草は、やはり残酷だった。

「いーの、いいのよ。暇潰しなんだから」

言葉は残酷だ。ところがフィスエシルにはまったくと言っていいほど邪気がない。
ポルメリアに構ってもらうのを待ち望むケルマディクの孤児院の子供たちのように、屈託がなく悪気がない。
その事にポルメリアは苦笑した。

「解りました。口下手なので何処まで楽しんでいただけるか解りませんけど、退屈しのぎでよろしければ、お話しましょう」

本当は明日からの戦いの為に休んだ方がいいのかも知れない。
しかしポルメリアはこの無邪気で無遠慮な天使の血を引く魔術師に自分の過去を話すのも悪くないと思った。
一人で溜め込んだ罪深き所業を誰かに話すのは、心苦しいと思いながらも胸の重みが取れるようで心が軽くなる。

もしかしたら、この人はそんな事を見透かして私に話せと言ったのだろうか？それとも、やっぱり暇潰しの好奇心なんだろうか。

おそらく後者だろうと確信しながらも、話しているうちに軽くなる胸のうちを思うと感謝せずにはいられなかった。

これが本当の天使の力なのだろうか？

話しながら、ポルメリアはぼんやりとそんな事を思った。

兄弟弟子を二人亡くしたばかりなのに師匠のフィスエシルに命じられて各地の情況を調べていた彼女の弟子達が、
とりあえずの報告をまとめたのは東の空が白み始めた頃だった。
お世辞にも楽しい話とはいえないポルメリアの昔話にフィスエシルは熱心に耳を傾けていたが、
弟子達が報告をしにやってくるとすぐさまポルメリアに話をやめるよう指示する。
そして弟子達に結果を述べるよううながした。

「あーらら、フォリヴァス以外の中原諸侯は壊滅ね。カシュール坊やにとってはいい知らせだわねー」

エルフは睡眠を取らなくても平気な種族だ。そしてポルメリアも徹夜ぐらいで音を上げる体ではない。
フィスエシルの弟子たちは人間やエルフが多いようだが、
交代で仮眠を取っているのか報告に来た人間の弟子も疲労しているようには見えない。

だがその知らせを聞いてフィスエシルのように軽口を叩けるポルメリアではなかった。

「とてもいい知らせとは思えないのですが・・・」

「そう?王国宰相カシュール・フォリヴァスの命令に異議を唱えそうなヤニース、
シヴァース、ハガートの宮廷がそれぞれ消滅しているのよ。
『天使王国』の玉座が絡むとなれば彼を支持していたアカパイン、
イルーク、キスリングだってどういう態度を取るか解らなかったし、
彼らが消えればカシュールは誰にも気兼ねする事なく中小領主に命令を下せるわ。

いやぁ、ここ最近の中原の戦乱って、王国宰相位を巡っての、旧七大公家の派閥抗争が主たるものだったからさー、
それが一挙に解決しちゃったみたいで、すっきりしたわねぇ」

確かにそういう考え方もあるのだろう。だがポルメリアはフィスエシルのように喜ぶ事はできなかった。
その様子を見てフィスエシルはニヤニヤ笑っている。

「優しいのね、貴女は」

「・・・甘いとお思いですか?」

「そうね。だから貴女はいつも悩むのよね」

「歯がゆいとも思いますが、人が死ぬ事を喜ぶ事はできません」

「そうね。それはそれでいいんじゃない?」

フィスエシルは簡単に肯定する。否定されると思ったポルメリアは拍子抜けしたようにフィスエシルを見た。
相変わらずフィスエシルはニヤニヤ笑っている。

「皆が皆、同じ価値観を持つ事はないわ。カシュールにとってヤニース家が消滅した事は喜ばしい事でしょうけど、
ヤニース家に仕えていた人たちにとっては取り返しのつかない悲劇よね。
私だって悪魔との戦いに指揮系統が早期に統一される事を望まなければ、人が死ぬことが望ましいとは思わない。

まぁ貴女のように戦う事をさだめられた人が、こういう事を一々気に病んでいたらキリがないし、やっていられないと思うけど、
それも貴女の人生だしね。悩んだり苦しんだりすればいいのよ。そのうち、納得する結論を見つけられるでしょうよ」

「そうでしょうか?」

「さぁ?解らないわ。いずれにしても私にとっては他人事だしね」

フィスエシルというハーフエルフ、ハーフエンジェルは悪い人物ではない。
だがポルメリアが思っていたような完全無欠の善人でもなかった。

天使よりもエルフの、自由奔放な気質が強く出ているせいかも知れない。その態度は何処かの誰かを思い出させた。

「さぁて、この情報を今一番知りたがっているカシュール坊やに教えてあげましょうかね。この良くもあり悪くもある情報を」

彼女の最後の言葉が気になった。中原諸侯が壊滅したと言う事は、
カシュールにとっていい知らせと今さっき彼女自身が言ったではないか。彼にとって悪い知らせとは何だろうか。

「他にも何かあったのですか」

弟子が差し出した報告書を一枚、彼女は読み上げた。そこには悪戯めいた笑みは浮んでいない。

「ヤニースの求めに応じて大軍を率いてアンゲルウルプに向かっていたオウルバインの宮廷魔術師と連絡が取れないの。
オウルバインの宮廷が悪魔の襲撃にあって消滅したか、或いは軍そのものが敗北してしまったか。
南方諸侯の雄オウルバインは、おそらく主力を率いてアンゲルウルプに向かっていたでしょうから、軍そのものが敗北したなら、
先にロスペロッソとかいう悪龍に蹂躙された西方に続き南方の戦力も当面あてにできなくなったというわけ。

オウルバインの宮廷だけが消滅しているなら、救われるんだけどねぇ」

諸侯同士の興廃には無関心なフィスエシルも実際の戦力が失われる事には痛手を感じているらしい。
玉座を争う競争者がまた一人減った事はカシュール・フォリヴァスにとっては喜ばしい事だが、
悪魔の軍団と戦う事を考えると戦力の減少が手痛い事実だ。

「とにかく、カシュール坊やに教えないとね」

フィスエシルは昨夜のようにエルフの少女二人をお供に連れて歩き出す。当然のようにポルメリアもその後を追う。

カシュールとその廷臣たちは広間を会議室代わりにして徹夜で議論と情報収集をしていたようだ。
主にフォリヴァス家の領域の情況を把握し、各地に命令を下していたようす。

「これは、お早いお出ましで」

徹夜明けにも関わらずカシュールはにこやかにフィスエシルを迎え入れる。
広大なフォリヴァス家の所領を把握し、各地に一々指示を出すという骨の折れる作業をした後だが、カシュールに疲労の色はない。

「あら、お忙しいと思ったけど、ずいぶん元気ね」

「これから先もやる事は山ほどあります。疲れたとは言っていられないでしょう。
貴女も私の仕事を増やしに来てくれたようですし？」

「あたり。弟子達に命じて情報収集させたの。都市魔術師といっても私にできる事はこれくらいだし」

「いえいえ、ありがたいかぎりですよ。これは私への愛ゆえと考えたいぐらいだ」

「あー、悪魔の軍団に勝てた英雄の求婚を受けるってやつね。
まぁとにかく悪魔どもをテッラムリアからたたき出してくれるのが先決よ。後の事は後で考えるという事で」

「つれない方だ」

差し出された報告書を一瞥しカシュールはだいたいの情況を把握したようだ。

「悪魔どもは順調に、メルクスを中心として同心円状に勢力を拡大しているようですな」

「地名だけで解るの？」

「『天使王国』の地図なら頭の中に叩き込んであります。
王国宰相としては当然ですよ。オウルバインの大軍が一夜にして崩壊の可能性あり、ですか。いい知らせですな」

意外な事を言うカシュール。それには流石のフィスエシルも首を傾げた。

「そうかしら？南方の主戦力は粉砕されたようなものよ？」

「オウルバインの権威失墜の方がこの際喜ばしい。
戦力は後からどうにでもありますが、旗頭が二つも三つもあっては戦力の分散、指揮系統の混乱と百害あって一利なしですからね」

「貴方の競争相手も減るわけだし？」

「そうです。まもなくその競争相手の一人が到着すると言っていますしね」

「誰がくるの？」

「トーマス・ケイン・ウォレンサー。東方諸侯の旗頭ですよ」

もともとフォリヴァス家とウォレンサー家は伝統的に同盟を結び合う家同士だ。
中原と東方、別々の勢力基盤で競合しあう事はないし、自地方外の大勢力と友好関係にあるというのは、
同じ地方に領地を持つ他の諸侯を牽制する事ができる。

とはいえ、だからといってお互い友好関係にあって個人的な友誼によって深く結ばれているのかと言えばそうでもない。
お互い遠くにあって直接利害関係にないから同盟を結んでいられるのだから、
もしこれから対悪魔の戦争において利害が生じればどうなるか解らない。

「あーらあら。貴方にとっては強力なライバルの出現ね」

「ライバルの出現に慄いていては何もできませんよ。
宰相位を保持しているとはいえ、我がフォリヴァスも所詮一諸侯に過ぎませんし」

「ご謙遜を。最大の諸侯でしょ？」

八つもの諸侯領を一族で占有している諸侯は他にいくつあるだろうか。東方最大の諸侯であるウォレンサーとて六つである。
南方の雄オウルバインも五つの諸侯領を持つに留まる。
だがそんなフォリヴァスも『天使王国』全体から見れば、ほんの一握り土地を支配しているに過ぎない。

「対悪魔の戦争など、一諸侯の力で遂行できるものではありません。
できるかぎり生き残った諸侯と協力して戦うしか道はないでしょう」

「まとめる自信がおあり？」

フィスエシルは挑発的に微笑む。カシュールはそれを受けて余裕の笑みを浮かべた。

「支配の要点はつかんでいるつもりです。ウォレンサー公がおいでになったら軽く打ち合わせをしましょう。
その前に貴女の弟子が調べてくださった残存勢力に協力を呼びかけ、勢力の結集を図ります。
主導権を握って放さなければ、こちらのものですよ」

「ウォレンサー殿に無断で諸侯や神殿や、魔術師、諸族と連絡を取るの？彼に不快感を与えるんじゃないかしら」

「こちらは『王国宰相』の肩書きで招集するのです。ウォレンサー殿とて否とは言えますまいよ」

カシュール・フォリヴァスは昨夜の会議で今後の段取りを決めたようだ。
他次元から未知の勢力に奇襲をかけられ、有力諸侯の大半が滅亡し、
今も悪魔たちは着実に占領地を拡大しているというのに、彼は動じた様子を微塵も見せなかった。
不安な気持ちを抱いていないのか、それとも、それを隠し通しているのか。
リュイーズが心酔していた主君は、野心の大きさに見合う気概があるのだなと、ポルメリアも感心した。

「悪魔と戦う前に、この世の理を通さなければなりません」

「失望している？」

フィスエシルの質問は半ばポルメリアにかけられたものだ。
『善』の為に『悪』と戦うというのに、人々は尚主導権を争って駆け引きするのだ。
ポルメリアは暗澹たる思いにかられたが、カシュールはそんな事に思い悩む男ではなかった。

「単なる手続きですよ。私が主導権を握れば良いのでしょう？」

その自信と野心。これは良き事なのか、それとも悪しき事なのか。
ポルメリアを見て楽しそうに微笑むフィスエシル。その彼女に対してもポルメリアは言葉を失っていた。

「頼もしいわね、宰相閣下。その心意気なら悪魔との戦にもきっと雄々しく戦い抜いて下さるわね。
エルフやドワーフの諸侯たちとも渡り合って、テッラムリアを救う為に世界をまとめて下さるわね？」

フィスエシルの悪戯っぽい微笑みがカシュールに向けられる。
フォリヴァスの宰相大公も、これが作戦会議ではなく社交界での歓談のように穏やかに語り、彼女に微笑み返した。

「全ては貴女への愛の為ですよ、最愛の魔術師どの」

「あら、権威権力への野心の為、と正直におっしゃった方が、好感がもてますわよ？」

「貴女の好意が得られるなら、そう申しましょう」

「相変わらず、お上手ね。それなら頑固者のドワーフはともかく、愉快なエルフたち相手に引けはとらないでしょう」

昨夜も感じた事だが、確かにそこにはポルメリアが入る事ができない、馴染めない世界があった。
この二人は確かに『善』なる世界を代表し、その勢力をまとめて『悪』である悪魔の軍団との戦いに人々を率い、
駆り立てていくのだろう。

しかしその属性が『善』であるとしても、この虚為に本音を覆い隠して、

味方でありながら全てを告げずに、嘘は言わないにしても本当の事も言わない彼らの言動に疲れを覚えた。
そしてそんな行為に何の疑念も抱かず、ごく普通に呼吸するようにそんな会話を交わす彼らについていけなかった。

諸侯との会議に備える為、カシュールは部下に指示を与えつつ部屋から出て行く。
そんな彼をにこやかに見送りながら、フィスエシルは例の悪戯っぽい笑顔を浮かべて、浮かない顔のポルメリアに囁いた。

「いいのよ。ここは貴女が関わるべき世界ではないもの。貴女は戦士、戦う事こそその本分。
ただ、貴女がどんな人達を味方して戦うのか、それだけは見届けておいた方がいいわね」

「どうしても、ですか」

「・・・自分に戦えと命じる者たちの正体を見極めておいた方が、納得しない？」

どうだろう。そういうものだろうか。

だが一つだけ確かなのは、諸侯たちの会議では確実にポルメリアは部外者になるだろうという事だ。
彼女は何処までも戦士であり兵士であった。『英雄』にはなれない。

そうか。自分を戦場へ送る者たちが一体どういうものたちなのか、それを見ておけという事なのか。

フィスエシルの笑顔を見ながらポルメリアはそういう風に納得する事にした。
これから始まる政治劇に観客として立ち会う。
それを経験するのも良いものだと、フィスエシルの笑顔は言っているような気がした。

「事情を知って戦う方が、良い立ち回りができると思うわよ」

どこまで本気なのか、相変わらず解らない。だがフィスエシルの言葉に従うのも無意味ではないとポルメリアも思った。

鐘が響いた。諸侯の到着を知らせる鐘の音だ。
ウォレンサー公が到着したのだろうか？『善』と言われる者たちが集う、一幕の狂言が始まろうとしている。

ポルメリアの心に昂揚感はない。これから起こる事を見極める為にもそれが良いのだと、自身に言い聞かせた。